

ミャンマーにおける
民政移管と文化遺産保護
に関する一考察



大谷・片山ゼミ

15AR064

西山琴乃

はじめに

世界 3 大仏教遺跡の 1 つであるバガン遺跡は、今日に続くミャンマーの文化的豊かさを示したものであり東南アジアを代表する文化遺産、世界最大の仏教遺産群といえる。これらには現在でも人々が足を運び「ミャンマーの遺跡は生きている遺跡であり自分たちのやり方で守る」という考えからユネスコからの修復支援もなく、独立後の政治的社会的条件によって文化遺産に対しては十分な保護が図られず、いまだに世界遺産リストへの記載が一件も実現していない。

しかし近年、軍事政権から民政移管し国際社会に対して開かれようとしているように見える。民政移管後の 2011 年の外国人観光客は前年から 25% あまり増え、去年 10 月には日本からの直行便も運行されたことから今後も日本からの観光客数が伸びることが期待される。このように国内外からの投資増大と開発、都市化の波が一気に押し寄せようとしているが、それが文化遺産にとっての新たな脅威となることも懸念されつつあり「生きた」遺跡をどう守るのか、国際社会はどのような支援ができるのかが国際的に注目されている。

ミャンマーにおける遺跡やそれに関する施設を訪問することで文化遺産保護の現状を視察し、インタビューやアンケートを通して現地の人々・旅行者の遺産に対する意識調査を行うことによって、その最新状況を確認しその将来を考える。

日程 (目的地：ミャンマー)

出発日	2014年	2月	26日
帰着日	2014年	3月	19日
	滞在地	行動・調査内容	
第1日目 2/26	日本→ミャンマー	移動	
第2日目 2/27	ヤンゴン	現地の人々への聞き取り調査をしながらスーレーパゴダをなど仏教国ミャンマーの象徴というべきパゴダを視察 国立博物館にて資料収集	
第3日目 2/28	ヤンゴン	JICA ミャンマー事務所にて資料収集	
第4日目 3/1	ヤンゴン→バガン	夜行バスで移動	
第5日目 3/2	バガン	現地の人々への聞き取り調査を行いながら、オールドバガンや世界遺産登録延期になったバガン遺跡の保存状況を視察	
第6日目 ～第14日目 3/3～3/11	バガン	考古学博物館にて資料収集	
		パガン王朝時代よりミャンマーの土着宗教であるナッ信仰の聖地ポッパ山にて遺跡の保存に関する視察	
第15日目 3/12	バガン→ヤンゴン	移動	
	ヤンゴン→バンコク	タイにてゼミ旅行に参加	
3/19	バンコク→日本		

成果報告

1. 現在のミャンマーという国

まず、まだ世界に知られていないミャンマーについて特徴を踏まえながら説明する。

★ミャンマー概要

面積は日本の1.8倍、人口は6495万人(2013年IMFより)で日本の約半分である。宗教に関しては、仏教89.4キリスト教4.9イスラム教3.9となっている。

公用語はビルマ語。識字率92%(JETROより)。

1988年9月国軍が民主化運動を弾圧し軍事政権が誕生したが、それ以降アウンサンスーチー氏らが率いる国民民主連盟(NLD)の運動により、2010年11月の総選挙で連邦団結発展党が圧勝。2011年3月にテインセイン大統領率いる新政権が誕生し民政移管された。

★ミャンマーの特徴

写真やインタビューなど現地で手に入れた情報をもとに特徴を説明する。インタビューに関しては、ヤンゴン在住の日本人2名から話を伺った。1人は軍事政権期にも一度来緬したことがあり現在語学学校に通われている塚本さん。もう1人はJICAの職員である千田さん。

仏教大国ミャンマー

仏教徒が9割であるミャンマー。ヤンゴンにあるミャンマー最大の仏教聖地「シュエダゴオン・パヤー」には清掃する人々や熱心に拝む敬虔な仏教徒の姿がみられ、観光名所としての役割をもつだけではないことがわかる。

日本で一般的に信仰されている仏教は大乗仏教であるが、ミャンマーでは南部上座部仏教であり、多くの部分で違いが見られる。日本では一度出家をすると死ぬまで僧籍に入る事が普通であるが、ミャンマーの一般的な南部上座部仏教では、出家も還俗も自由なために短期出家の制度が確立している。



シュエダゴオン・パヤーにてお参りする人々と清掃するミャンマー人



←**ヤンゴンの市庁舎。**

市庁舎、博物館などの国家施設はよく整備されており、大きくきれいな建物ばかりであった。

→**ミャンマー人の日焼け止め「タナカ」**

右の写真の女の子の頬につけられているのが「タナカ」というミャンマーの日焼け止めである。ミャンマーを歩いているとよく見かけるものの一つ。これには日焼け防止以外にも清涼感、保湿や殺菌、肌荒れ・ニキビ予防などの効果があるとされている。



日本では白い肌に赤い頬がきれいだと思われているが、ミャンマーではこのタナカで頬にさまざまな模様を描いておしゃれを楽しんでいるようだった。



←**伝統衣装ロン**

ジーを着て路上の市場に食材を買いに来る午前の現地の人々。

→ミャンマーの男性が吐き出した「**クーン(噛みタバコ)**」のあと。



※「クーン(噛みタバコ)」について

石灰を溶いたものをキンマの葉に塗布し、カットしたヤシ科の果実の種子をくるんだものを口に入れてガムのように噛む。種子にはニコチンと同様の興奮または刺激作用があると言われ、しばらく噛むと口の中が真っ赤になる。飲み込まないでそのまま吐き出すが、そのあとが路上に残っているため血液のように見える。もともと重労働を強いられる労働者の疲れを癒すのが目的であったが、現在では特に肉体労働者ではなくても多くのミャンマー人男性が嗜好品として口にしていく。

軍事政権期から民政移管後のさまざまな変化

○衣服○軍事政権期にはミャンマー人は決まってほとんどの人が現地人衣装ロンジーを着ていたが、民政移管後には女性のロンジー着用率は年々低下し洋服を着る人が増えつつある。特に都心部の若者にその影響が見られ、これは民政移管による韓国ドラマや外国商品の増加が原因と考えられる。しかし郊外へ出るとその影響はまだ及んでいないようにみえた。一方、都心部でもお寺に行くときや目上の人に会うときはロンジーを着るといったように、その伝統は人々の心の中に残っており、そのことに誇りを持っている印象を受けた。

○タクシー○タクシーは軍政期から日本の中古車がほとんどであることに変わらないのだが、民政移管後には中でも数年前よりもきれいで良いものが増加している。ミャンマー人は性能の良いものが好きで、特にトヨタ車が多い。



日本中古車のタクシー

○アウンサン・スー・チー○塚本さんによると、軍政期には「アウンサン・スー・チー」の名を出してはいけない雰囲気は街中に広がっていたが、民政移管後の現在では口に出しても特に問題ない様子である。実際、ヤンゴン中心部にある市場の売り子がアウンサン・スー・チーの名を出して観光客に近づいている様子や、道端の本屋にも彼女が表紙に載っているものが多く見受けられた。

○外国人・外国商品○民政移管後、明らかに外国からのビジネスマンや観光客が増加している。しかしその激増についていけず、圧倒的にホテルが足りていない。宿泊代は数年前の何倍にも値上がりしている状況。インターネットがつながりにくいため、連日ヤンゴン市内の外資系ホテルのロビーにはビジネスマンであふれている。またパン屋・レストラン・中華料理店・日本料理店などの外国の店、また外国商品がここ数年で一気に増加している。実際に外国料理店に行ってみたところ、オーナーはシンガポール人で従業員はミャンマー人、客は外国人で、ちょうど民政移管された2011年にオープンしたというところもあった。



トレーダーズ・ホテル

○工事中現場○ヤンゴン市内には工事現場が多く、その中に日本のビルが建設予定のところもあった。



日本のビル建設中の現場

軍事政権期から変化していない点

◇インフラ◇

鉄道は市内1周するのに3時間もかかっているし、利用客はほとんどがミャンマー一人で観光に役立てられそうにもない。また水力発電(70%)に頼っているため電力供給は不安定で急に工場が止まることも少なくない。せっかくミャンマーに進出してきても、工場が動かなければ意味がない。水力発電外の発電方法を模索し、

早急に解決すべき問題である。また、漏水率も50%(2011年)であり、まだまだ改善の余地がある。上に述べたインターネット回線の整備も必要。



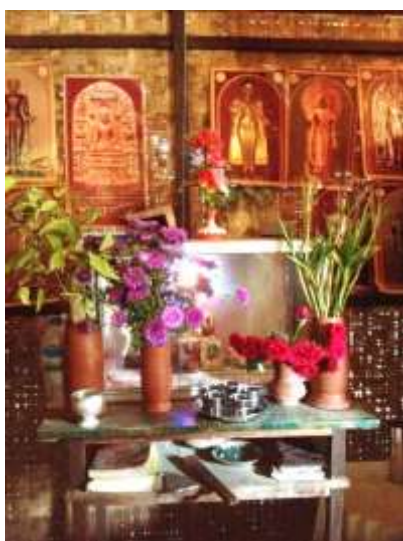
ヤンゴン市内の鉄道

◇教育◇

ミャンマーの教育制度は小学校5年間、中学校4年間、高校2年間、大学2~7年間となっている。実際に高校を訪れたところ、いわゆる「考えさせる」授業ではなくほぼ暗記型の授業であり先生が言ったことを繰り返すだけであった。しっかりとした教授法を学んでおらずうまく教えられる先生もあまりいないという様子である。いくつか学校を訪れたが、どの学校も席は通路をはさんで男と女に分かれていた。



バガンの学校の生徒達



寮内にある仏壇



学校の敷地内にある先生の部屋

貧しい家庭の生徒には学校に併設された寮があり先生も一緒に暮らしている。中には仏壇があり、毎朝生徒たちがお供えしているという。ここでも熱心な仏教徒の姿を垣間見ることができた。

2. ミャンマーにおける文化遺跡保護状況

ミャンマーには手つかずの自然や仏教遺跡などの観光資源が多く残っている。民政移管後の現在では世界中から多くの観光客をひきつけており、世界で最も有名なガイドブックの1つである「Lonely Planet's Best in Travel」の2012年版では、おすすめの国第2位としてとりあげられている。

‘We want people to come to [Burma](#).’ That’s the words of the National League for Democracy (NLD), the opposition party that has urged foreigners to stay away since 1996. This changed in late 2010, when the NLD revised its boycott to encourage independent travel (as opposed to package tours) following the release of Aung San Suu Kyi, who had spent 15 of the past 20 years under house arrest. As a result, Myanmar is set to be a hot new destination for independent travellers. Rimmed by mountains and white-sand beaches, the kite-shaped country’s most accessible area is the centre, which is filled with timeless towns and countless pagodas, especially the 4000 examples found on Bagan’s 26-sq-km riverside plain. Beyond the attractions, there’s the fervently Buddhist locals, who might just be the world’s sweetest people. If you do go, be aware that the revised boycott doesn’t mean troubles are over.



(<http://www.lonelyplanet.com/bhutan/travel-tips-and-articles/76856>)

ここでは上記の下線部に書かれた世界3大仏教遺跡の1つとされているバガンを取りあげる。約26km²の川沿いのこの地域には11世紀頃のバガン王朝時代に王によって建てられた4000にもおよぶパコダ(仏塔)が残っており、それらは現在でも増築されているので今後さらに増えていくとおもわれる。



新しい仏塔を建設中↑→



これら仏塔・寺院の多くは 1975 年の地震によって傷つけられたが、文化庁の保護や現地の人々の寄付と管理によって成り立っている。よって大きく有名な仏塔や寺院ほど修復にあてられる額は大きくなり、さらに国や外国によって修復支援がなされているものは現在も積極的に作業が行われている。しかし一方、観光客もめったに訪れないような有名でない小さなものはコウモリが住み、糞が床に落ちていて独特のにおいを放っている。そうではなくきれいに現地のミャンマー人が管理しているものもあるが、仏塔の数が 3000 以上ともなると、現地の人々が管理できる範囲にも限界があったり、管理の質にも大きな違いが出たり、野放しになっているものも少なくない。



野放しにされた仏塔



崩れてしまった門



以前人が住んでいたということもあり、壁にペンキが塗られ、描かれた仏教絵画が見えなくなってしまうもの(写真右)や仏塔の頂上付近に切れた電線がそのままになっているもの(写真左)もある。

また天井に描かれた模様については、ほとんどはがれて(写真右)しまっており、レンガはいつ壊れ落ちてきてもおかしくないという状況(写真左)であった。



(←)

しかし、国際機関などの補助を受けていなくても壁に描かれた仏教絵画がきれいに残っているところもあった。

外国からの補助のある寺院の例

バガン最大のアーナンダ寺院は現在インドが補修補助を行っている。中ではペンキをはがす作業や床を張り替える作業が行われていた。



アーナンダ寺院



床の張り替え作業中

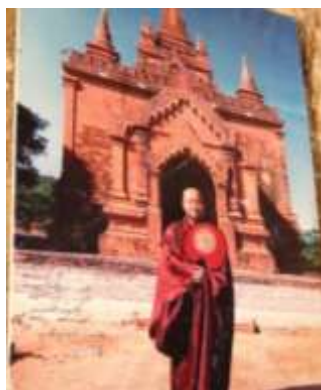


ミャンマー文化庁とインドの共同プロジェクトであることがわかる看板



ペンキをはがす作業中

そのほか韓国の僧が建てた仏塔は UNESCO の補助を受けており、中は清潔感があるが、天井が鉄骨で固められ見苦しくなっていた。



仏塔を建てた韓国の僧



UNESCO の看板



鉄骨で固められた天井

以上のように数多くの仏塔を見てきて国際機関や外国からの補助を受けている寺院は積極的に補修され、その他の仏塔は現地の人々が地道に守っているという印象を受けた。彼らは観光客が来たら門を開け、日の入りが過ぎるとそれを見に仏塔に登っている観光客に対して「早く帰りたいから降りてきてー」と冗談交じりで言っている姿を見た。

◇観光客◇

ここで観光客に目を向けていきたい。

観光客はほとんどが欧米人でアジア系は少数派であった。彼らの中には知人からの勧めでやって来た人が多く、中には民主化されたからという理由でミャンマーを訪れた人もいた。このようにミャンマー観光は現在口コミで広がっている状況である。また会話の中で、彼らのほとんどがミャンマー一人の好きにふれ、広大な平野の中に浮かぶ無数の仏塔群と日の出・日の入りを見たいという目的をもち、観光客であふれた場所は嫌いだと言っていた。



日の出を見るために仏塔へやってきた外国人観光客

☆アドベンチャー的要素を含む旅行スタイル

旅行のスタイルとして、馬車に揺られながらゆったりと景色を楽しむ方法もあるが、多くの観光客は広大な草原地帯を自転車やバイクで自由に移動し、ガイドブックを見ずに自ら発見した暗い仏塔のなかを電灯で照らしながら見て回り楽しむというものが多くみられた。また、なかには仏塔の天井奥の方まで行き、ゴキブリの死骸や蜘蛛の巣をかき分けながら外へ出て、そこから見た朝日がとてもきれいだったと話す



バイクで移動する観光客

イギリス人観光客もいた。

旅のスタイルは人それぞれだが、道路や電灯など整備されていないからこそ自分で動き、新しいものを見つけ楽しむというアドベンチャー観光を楽しむ旅行客の笑顔が印象的だった。

◇ミャンマー人◇

最後にバガンの遺跡に関してミャンマー人のミンミンさんにお伺いした。彼はミャンマーの画家で、絵を外国で売って生計を立てており、今後もっと多くの国にミャンマーのことを知ってもらいたいと話す。「もっと多くの観光客に来てほしいですか？」という質問に対し、

「もちろん。でも観光客が多すぎることによってバガンが汚くなるのは嫌。これらのバガンの遺跡は私たちの伝統だから。」



という答えが返ってきた

た。ここまでの答えが返ってきたことは予想外で驚いた。この言葉には「自分たちは隣国の状況を知っている」「今まで守ってきた遺跡を自分たちでこれからも守っていく」という意味が込められているように思う。



↑ミンミンさんが描いた絵↑

その他のミャンマー人に聞いてもやはり近年で観光客が急に増えたと言っており民主化の影響はかなり大きいことがわかる。また長い間軍事政権下のなか民主化を手に入れただけあって、ミャンマーの人々は仏教への熱心さや家族や古いものを大切にする心に加えて、素直で強い意志をもっているように感じた。

○考察○

これまで変化の只中にあるミャンマーにおいて、ミャンマーの仏教遺跡群の現地視察に加え観光客と現地に住むミャンマー人がそれらに求めることについてみてきた。地震が起きた後の遺跡にしては立派なものが多くあったが、現地の人々が管理している小さな仏塔では、彼らの保護の仕方が様々で統一されていないことが問題点だとおもわれる。

結論として、バガン全体に国際機関の補助がない現在においては遺跡保護のために最低限の観光客対策をすることがこれからのミャンマーにとって良いと考える。最低限の観光客対策とは、

* 大きな寺院に寄付されたお金をその地域にある小さな仏塔（観光客にとって危険な崩れ落ちそうな天井や野放しになったもの）の修復費用にも充てること、そして現地住民にその後の管理を統一させ、徹底させること

* 仏塔を増築している現地住民に今後誰がどのように守っていくのかの決まりをつくらせること

* 観光客が仏塔内の壁画をフラッシュを焚いて撮ることを禁止させること

* ホテルを増やすこと

つまり観光客誘致策よりも先に遺跡の修復・保存や現段階で大きな問題にもなっているホテル不足を改善することに目を向けることが重要であると考え。観光客対策をすることで、それが同時に遺跡の保護につながる。

これからミャンマーを訪れる観光客数はさらに増えていくと思われる。それはバガンがこれから何年後かに世界遺産に登録される可能性よりもずっと確かである。遺跡保護や観光地化もまだまだ始まったばかりだが、この流れにのみこまれないように現地住民の仏教への熱心さや古いものを大切にする性格を活かした取り組みによって、観光客と現地住民、そしてバガンの遺跡の良い関係が築かれ続けていくことを願う。



エーヤワディー川からの夕日

3. 日本との国際関係のあり方

民政移管された現在、ミャンマーには多くの国が進出し始めている。観光政策に関してはアメリカがマンダレーへ、文化遺産保護に関しても、上に挙げたインドの他にイギリスが植民地時代の建物



に関して補助を行い始めているものもある。日本もミャンマーと長い歴史を共有した国の一つであり、観光客だけでなく、安価で良質な人材や豊かな資源を求めてやってくる企業

が急激に増えていくだろう。そこで大切なのは、やはり両者にとって良い交渉であり、現地の人々への理解であると考えます。

ミャンマーで一番驚いたことは仏壇や仏像がカラフルな電灯が飾られていることだった。日本で質素な仏壇やお寺しか見ていなかったため不思議な感覚を味わった。しかしこのことを現地の人に話しても理解してもらえないはずもなく、その時初め



カラフルな電灯↑

てミャンマー人と日本人の仏教に対する価値観の違いを身に染みて感じた。またミャンマーへ行って一番もどかしい思いをしたのは、「ヤンゴン総合病院（通称：JICA 病院）」へ行った時のことである。このヤンゴン総合病院



JICA 病院にて↑

については前日に JICA ヤンゴン事務所へインタビューに行った際に、事務所の方が「ミャンマーの人々からは『JICA 病院』として親しまれているんですよ」と言われ、ぜひ見たいと思い行ってみた。しかし行った先は予想以上の劣悪環境であり、ベッドではなく廊下で寝ている人がいたり、医療器具が整理されている様子もなかった。病院を建てる事が出来ただけでも大きな成果なのかもしれないが、より改善していく必要性が大いにあったと感じた。

以上に挙げた経験は本当に小さなことだが、異文化理解のもつ影響力は日本や諸外国とミャンマーがより良い関係を保ち続けるための永遠の課題であると考えます。

最後に…ここまで述べてきた研究成果は今回の旅のほんの一部であり、本当に充実した最高の旅をして日本に帰ってくることができました。日々の授業でご指導してくださった大谷先生と片山先生に加えこのような機会を与えてくださった先生方、現地で協力してくださったすべての方々

に本当に感謝しています。ありがとうございました。